

沖縄県石垣島のカタツムリ墓起源伝説

原田 信之
(日本文学)

オヤケアカハチは、第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七〜一五二六在位）の時代に活躍したとされる八重山諸島石垣島の首長の一人であった。八重山諸島与那国島の鬼虎と同様に、琉球王に命じられた仲宗根豊見親らによって討伐された十五世紀に実在した人物である。アカハチには古乙姥（クイツバ）という妻がいたとされ、アカハチが征伐された時に一緒に捕らえられて殺害されたという。石垣島には、オヤケアカハチが琉球王に命じられた仲宗根豊見親らによって討伐された話や妻の古乙姥にまつわる話が伝承されている。オヤケアカハチは琉球王府の反逆者とされたため、妻の古乙姥の遺骨は姉の真乙姥を祀る真乙姥御嶽の片隅に葬られ、人々に踏みつけられたという。古乙姥の墓はツダミ（カタツムリの意）の墓と呼ばれ、近年まで真乙姥御嶽の片隅にあったが、一九七〇年に大浜の崎原公園に移された。古乙姥にまつわる伝説は、琉球王朝の先島諸島統治をめぐる問題や南西諸島における英雄伝説の問題等を考える際にも重要な手がかりを与えてくれるものと考えられる。

（キーワード）古乙姥、カタツムリ墓、オヤケアカハチ、真乙姥御嶽、長田大主

はじめに

『中山世鑑』（一六五〇年成立）や『中山世譜』（一七二五年成立）等の琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統（一一八七〜一二五九）以降、英祖王統（一二六〇〜一三四九）、察度王統（一三五〇〜一四〇五）、第一尚氏王統（一四〇六〜一四六九）、第二尚氏王統（一四七〇〜一八七九）と続いた。この琉球の歴代王統を日本本土の歴史と対照させると、舜天王統から第二尚氏王統前期まではほぼ日本の中世に

相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。これらの王統のうち、本稿では、第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七〜一五二六在位）の時代に実在した古乙姥（クイツバ）という女性をめぐる伝説を中心として扱う。古乙姥の夫であったオヤケアカハチは八重山諸島石垣島の首長の一人であったが、琉球王に討伐されたという。石垣島には、オヤケアカハチや古乙姥に関する伝説が現在でも伝えられている。

宮古・八重山諸島は、一三九〇年（明・洪武二十三年、日本・元中七年）に

中山王察度に入貢してから一六〇九年（慶長十四年）の島津の琉球侵入まで琉球王国の統治下にあったとされる。この中山王察度への入貢に関しては、『中山世鑑』察度王の項に「洪武二十三年（一三九〇）庚午、南夷、宮古嶋・八重山嶋、重訳、始来貢ス」¹とあり、『中山世譜』洪武二十三年の項にも「本年。宮古・八重山。始来称_レ臣、納_レ貢于中山」²と同様の記述がある。また、『球陽』卷之一にも察度王の四十一年（一三九〇）に宮古八重山がはじめて来朝入貢したと記されている。これらの記述から、宮古・八重山諸島が中山王察度に入貢したのは一三九〇年とみられるわけであるが、『球陽』卷之一によれば、その時入貢したのは宮古の与那覇勢頭豊見親であったという³。

石垣島は日本最西端に位置する八重山諸島の主島で、沖縄本島那覇市の南西約四一〇キロにある。面積は約二二・五平方キロで、沖縄県内の島のうち、沖縄本島、西表島に次いで三番目に広い。島の中央の北寄りに、沖縄県最高峰で標高五二五・五メートルの於茂登岳がある。

反逆者オヤケアカハチの妻として誅殺された古乙姥の墓はツダミ（カタツムリの意）の墓と呼ばれ、人々に踏みつけられたという。本稿は、新たに採集した口承資料や関連資料の検討を通して、古乙姥伝説をめぐる諸問題について考察することを目的とする。

Ⅰ アカハチの乱と古乙姥

十五世紀後半頃から十六世紀初頭にかけての八重山地方は、石垣島石垣地区の長田大翁主（長田大主）、石垣島川平地区の仲間満慶山英極、石垣島大浜地区のオヤケアカハチ、石垣島平久保地区の平久保加那按司、西表島の慶来慶田城用緒、波照間島の明宇底獅子嘉殿、与那国島のサンアイ・イソバ等々各地の英雄たちが覇権を争った群雄割拠の時代であったとされている⁴。

これらの英雄たちのうち、大きく勢力を伸ばした石垣島石垣地区の長田大主と石垣島大浜地区のオヤケアカハチが対抗するようになった。長田大主は妹の古乙姥をオヤケアカハチと政略結婚させたが、兄の意に反し古乙姥はオヤケア

カハチ側についてしまったという。オヤケアカハチは琉球王府に反旗を翻したため、尚真王二十四年（一五〇〇）に討伐されてしまった。

次に、オヤケアカハチが討伐された時の記事を琉球の正史『球陽』（一七四五年成立）卷三「尚真王」の項から引用してみることにする（考察の都合上、便宜的に記号A B C Dを付した。また、引用に際し、傍線・波線を付し、丸括弧内に読みと注を記した）。

二十四年（尚真二十四年・一五〇〇）、錢原大将トナツテ、八重山ノ赤蜂ヲ征伐ス。

A 正義大夫梁徳、使ヲ奉シテ閩ニ入ル。而シテ国ニ回ルノ時、陡カニ逆風ニ遭フテ、喜屋武に飄到ス。土民海ニ出テテ、ソノ船隻ヲ扯（ヒ）イテ港内ニ吊（ツリ）進ム。時ニ錢原十三歳ナリ。土民等ニ随ツテ、外海ニ出迎フ。錢原ハ生資敦厚、氣宇軒昂ニシテ、大イニ庸俗ノ人ニ異ル。梁徳、忽倏之レヲ看ルヤ、深ク他ノ伶俐ヲ称ス。官舎、錢広之レヲ聞キ之レヲ慕フ。即チ父塩間ニ乞フ。那覇ニ携来シテ之レヲ養教スルニ、果然聡明英雄ナリ。学業已ニ成ルニ至リ、才知絶倫ニシテ、文武兼全ス。已ニ二九歳ニ及フヤ、広、家宅ヲ買得シ、以テ錢原ニ給ヒ、而シテ別ニ家戸ヲ立ツ。後、仕籍ニ陞リ、専ラ公事ヲ務ム。乾惕孜孜トシテ、朝夕懈ラズ。遂ニ命ヲ奉シテ九番ノ大将ト為リ、即チ大里等ト、士卒三千余人ヲ率領シテ、八重山ヲ征伐シ、以テ凱功ヲ得テ、帰国復命ス。

始メテ八重山ニ、大阿母並ニ永良比金ヲ置ク。

B 八重山ハ洪武年間ヨリ以来、毎歳入貢シ、敢テ絶ザリキ。奈ニセン大浜邑ノ遠弥計赤蜂保武川（オヤケアカハチホムカハラ）ハ、心志驕傲ニシテ、老ヲ欺キ幼ヲ侮リ、遂ニ心変謀叛ヲ致シ、両三年間、貢ヲ絶ツテ朝セズ。此時、石垣邑ノ名田大翁主ニ、二弟二妹アリ。一ハ那礼塘ト名ケ、一ハ那礼嘉佐成ト名ケ。一妹ハ真乙姥ト曰ヒ、一妹ハ古乙姥ト曰フ。那礼塘、嘉佐成等、恒ニ忠義ヲ存シ、肯テ赤蜂ニ従ハズ。遂ニ他ノ為メニ殺害セラル。名田大翁主ハ、古見山ニ逃レ去リ、隠レテ洞窟ノ中ニ居レリ。此時宮古ノ

酋長ニ、仲宗根豊見親ナル者アリ。赤峰ト和睦ナラズ。赤峰將ニ宮古ヲ攻メントシテ、二島騒動ス。事中山ニ聞ス。是レニ由リ、大里等九員ヲ遣ツテ將トナシ、大小戦船四十六隻ヲ撥シ、ソノ仲宗根ヲ以テ導キトナス。本年二月初二日、那覇開船ス。八重山ニ赴キテ赤峰ヲ征伐ス。大翁主大イニ喜ビ、即チ小船ニ乗シ、海ニ出テテ迎接ス。十三日引イテ八重山石垣ノ境ニ至リ、大里等上岸ス。只タ赤峰衆兵ヲ領シテ、嶮岨ヲ背ニシ、大海ニ面シテ陣勢ヲ布擺（フハイ）スルヲ見ル。又婦女数十人ヲシテ、各々枝葉ヲ持チ、天ニ号シ地ヲ呼び、万般咒罵セシメ、法術ヲ行フニ似タリ。大里等軍ヲ駆ツテ大イニ進ムヤ、賊兵及ヒ婦女、略ボ畏懼スルコトナク、賊陣開ク処、赤峰首出シテ戦ヲ搦（カラ）ム。大里大イニ疑ツテ曰ク、賊奴銳氣輕ク敵ス可ラズ。遂ニ四十六艘ヲ將ツテ分ケテ兩隊トナシ、一隊ハ登野城ヲ攻メ、一隊ハ新河ヲ攻ム。赤峰首尾相応スルコト能ハズ。官軍勢ニ乗シ、攻撃甚ダ急ナレバ、賊兵大敗ス。則チ官軍大イニ凱功ヲ獲タリ。赤峰擄ニセラレテ誅ニ伏ス。即チ名田大翁主ハ、深ク褒嘉ヲ蒙リ、古見大首里大屋子ニ擢ンデラレ、始メテ頭役トナルナリ。古乙姥ハ適イテ赤峰ノ妻タリ。罪ヲ受ケテ誅戮セラル。

C 一日永良比金ノ神、真乙姥ニ託宣シテ曰ク、イマ数十余ノ船ニ乗レバ、早ク那覇ニ到ルト。官軍僉（ミナ）曰ク、神託ノ告語、未ダ深ク信ズ可ラズ。若シ靈効アラバ、兵船ヲ護守シ、一斉国ニ抵レバ、宜シク以テ褒賞スベシ。若シコノ語ニ違フコトアツテ、前後シテ国ニ至ラバ、重罪恕セズト。真乙姥之レヲ聞イテ、意ニ謂フ。蒼天定ムニアラズ、風波測リ難シト。遂ニ美崎山ニ到リ、日夜断食シテ、誠懇ニ禱ヲ求ム。而シテ風雨ヲ厭ハズ、寒暑ヲ怕レズ。日已ニ久キニ至リ、身体憔悴シ、顔色枯槁シテ、庶呼（ホトンド）餓死セントス。時ニ平得村ノ多田屋遠那理往イテ之レヲ勞ラヒ、深ク之レヲ憫ム。而シテ船神庇ヲ獲テ、一斉二国ニ抵ル。

D 翌年ニ至リ、深ク褒嘉ヲ蒙ツテ、神衣ヲ恩賜ス。並ニ召入ノ命ヲ奉シテ、次年多田屋遠那理ヲ携ヘ、中山ニ赴キ入ル。王、真乙姥ヲ擢ンデテ始メテ

大阿母トナス。真乙姥命ヲ請フテ、大阿母ヲ遠那理ニ譲ル。王亦真乙姥ヲ擢ンデテ永良比金ノ神人トナス。此時遠那理、真乙姥ニ各金簪ヲ賜ヒ、且ツ大阿母遠惠嘉地五加屋、及ヒ俵米一石五斗ヲ賜フ。亦永良比金ニ俵米一石ヲ賜フ。―【割注】此レヨリノ後大阿母永良比金子々孫々其役ヲ世襲セリ。―

A 部分は『球陽』卷三尚真王二十四年（一五〇〇）の「錢原大將トナツテ、八重山ノ赤峰ヲ征伐ス」の項で、錢原という人物の経歴を記し、錢原が九番目の大將となつて大里らと兵士「三千余人」（傍線部）を率いて八重山のアカハチを征伐し、凱旋帰国したことを述べている。錢原は錢姓の阿波根真五郎（一四七九―一五四三）のことで、アカハチ征伐で手柄を立てた人物の一人である。⁶⁾

「始メテ八重山ニ、大阿母並ニ永良比金ヲ置ク」の項（BCD部分）には、オヤケアカハチの乱の詳細が記述されている。この項の梗概を示すと以下のようになる。

B 部分（アカハチが謀反をおこし誅殺されるまで）……八重山地方は明の洪武年間（一三六八―一三九八）以来毎年入貢して絶えることがなかった。大浜地区のオヤケアカハチホンガワラはおごり高ぶつた勝手な男で、老人をだまして子どもを馬鹿にし、ついに謀反をおこして両三年間入貢を絶つた。この時、石垣地区の名田大翁主（長田大主）には那礼塘・那礼嘉佐成という二名の弟と真乙姥・古乙姥という二名の妹がいたが、二名の弟はアカハチに従わなかったため殺害され、名田大翁主は古見山の洞窟に隠れ住んだ。この時、宮古に仲宗根豊見親という首長がいたが、アカハチと和睦できなかった。アカハチが宮古を攻めようとして騒動になり、これが琉球王府に伝わった。王府は仲宗根豊見親を先導役として大小四十六隻の戦船を組織し、二月二日に那覇を出発して十三日に八重山石垣に至つた。名田大翁主は大いに喜び、小船に乗つて迎え出た。アカハチ軍は險阻な地を背にして海に向かう布陣をしき、婦女数十人がそれぞれ枝葉を持つて呪術を行った。官軍は四十六隻の戦船を二隊に分けてアカハチ軍の首尾を急襲したため、賊軍は大敗してアカハチは誅殺された。名田大翁主

は古見大首里大屋子に拔擢され、八重山で初めての頭役となった。古乙姥は嫁いでアカハチの妻となっていたが、罪を受けて誅殺された。

C部分（真乙姥の活躍と多田屋遠那理）……永良比金の神からの託宣を受け、真乙姥は王府軍が無事帰還できるように美崎山で断食祈禱した。長期間の断食祈禱により真乙姥は餓死しかけたが、平得村の多田屋遠那理に助けられた。そうして、王府軍の船団は神の庇護をうけて一斉に帰還できた。

D部分（真乙姥らへの恩賜）……翌年、王より真乙姥へ神衣が恩賜されるとともに、王府への召し入れの命を受け、次年、多田屋遠那理を連れて中山に赴いた。王は真乙姥に大阿母という神職を授けたが、真乙姥は大阿母職を多田屋遠那理にゆずったので、真乙姥に永良比金という神職を授けた。王は二人に金のかんざしを下賜し、さらに多田屋遠那理に田地俵米、真乙姥に俵米を下賜した。子孫は代々その役を世襲した。

『球陽』巻三に記されているオヤケアカハチの乱の顛末から、王府による反乱軍鎮圧の様子が見える。那覇から「三千余人」もの兵士をのせた「大小戦船四十六隻」（傍線部）の大船団を組んで石垣島まで派兵していることから、王府が本気になってアカハチの乱を鎮圧しようとしたことがわかる。

また、B部分にある「婦女数十人ヲシテ、各々枝葉ヲ持チ、天ニ号シ地ヲ呼ビ、万般咒罵セシメ、法術ヲ行フニ似タリ」という記述から、アカハチ軍の婦女数十人がそれぞれ枝葉を持って天や地に号呼して呪詛するなど王府軍に対して何らかの呪術を行っている様子が見える（神女らによる王府軍退散の呪術であろうか）。一方の王府軍も、『球陽』巻三に引用した部分より後の「久米島ノ君南風、官軍ニ跟随シ、往イテ八重山ニ至リ、奇謀ヲ設ケ為シテ、深ク褒嘉ヲ蒙ル」の項の記述から、船団に久米島の君南風という神女をのせて八重山征伐に乗り込んで来たことがわかる。当時の戦いは、軍兵たちの戦闘の一方で、神女たちの呪術戦が行われたようで、興味深いものがある。

なお、神女たちによる呪術戦は、オヤケアカハチの乱から約二十年後に起こったとされる与那国島の鬼虎の乱の際にも行われたようである⁽⁷⁾。鬼虎の乱につ

いて記された「忠導氏家譜」に四人の巫女が従軍していることに注目した谷川健一氏は「巫女の呪術の力で敵を調伏することを目指したのである。仲宗根豊見親が与那国に攻め入ったアヤゴには「あけず舞」「はべる舞」を舞い踊ったとあるが、それは巫女の調伏の舞踊を指している⁽⁸⁾」と述べ、「仲宗根豊見親八重山入の時のアヤゴ」にある「あけず舞」「はべる（はへら）舞」は巫女の調伏の舞踊だと指摘している。

アカハチの乱の原因として『球陽』では、アカハチが謀反をおこして両三年間入貢を絶ったので討伐されたと記されているわけであるが、伊波普猷氏はアカハチの反乱はイリキヤアマリを祀る祭事を禁止されたことが原因とする⁽⁹⁾。これに対し、稲村賢敷氏は「修史の誤謬」を指摘し、「赤蜂謀反の原因が信仰問題からきているとみるのは誤りであるとせねばならぬ⁽¹⁰⁾」と述べている。関連史料が少ないため、アカハチの反乱の原因は未だにはつきりしていない。

名田大翁主（長田大主）の妹であった古乙姥は、兄の命令でオヤケアカハチと政略結婚させられ、オヤケアカハチとともに逆賊として誅殺された。古乙姥については、『球陽』B部分に「一妹ハ古乙姥ト曰フ」「古乙姥ハ適イテ赤蜂ノ妻タリ。罪ヲ受ケテ誅戮セラル。」（傍線部）と記述されているだけであるため、少なくとも実在の人物であったことは確認できるが、アカハチと同様に詳細はよく分らない。

土地の伝承によると、アカハチは波照間島で生まれ、後に石垣島大浜地区に渡ってから大浜地区で頭角を現したとされている。B部分の最初に記されているようにアカハチがおごり高ぶった勝手な男で老人をだまして子どもを馬鹿にするような人物であったかどうかは不明である。正史『球陽』は王府の側から逆賊としてのアカハチを描写しているため、ことさらに悪辣な人物とされた可能性は否定できないであろう。アカハチが『球陽』が記しているようなおごり高ぶった勝手な男であったならば、兄に命令されてアカハチと政略結婚させられた古乙姥が、兄や王府の意向に反してアカハチ側について誅殺される方を選ぶことはしなかったのではないかと思われる。

大浜地区にあるフルスト原遺跡は、アカハチの居城だったという説がある。大浜地区の古老はフルスト原遺跡の石積遺構を「ブスヌヤー（武士の家）」と呼び、一帯を「ブスヌヤマ（武士の山）」と呼んでいるという。また、『球陽』B部分の「赤蜂衆兵ヲ領シテ、嶮岨ヲ背ニシ、大海ニ面シテ陣勢ヲ布擺（フハイ）スルヲ見ル」（傍線部）という記述がフルスト原遺跡の状況と酷似していることからアカハチの居城だった蓋然性が高いとされている。なお、一九七八年三月、フルスト原遺跡は史跡として国指定の文化財に指定された。¹¹⁾

C部分とD部分には、真乙姥と多田屋遠那理の活躍と乱後の恩賜について記されている。尚真王は真乙姥に大阿母という神職を授けたが、真乙姥は大阿母職を多田屋遠那理にゆづったため、真乙姥に永良比金という神職を授けた。また二人に金のかんざしを下賜し、さらに多田屋遠那理に田地俵米、真乙姥に俵米を下賜したという。C部分・D部分の記述から、王府の船団を無事帰還させた真乙姥が王府から高く評価されたことがうかがえる。断食祈祷を通じて呪的な貢献をしたと判断されたようである。

現在、真乙姥は真乙姥御嶽（マイツバーオン。石垣市新川）に祀られ、多田屋遠那理は大阿母御嶽（ホールザーウガン。石垣市平得）に祀られている。真乙姥御嶽と大阿母御嶽は、真乙姥と多田屋遠那理というそれぞれの神女を葬った墓が人々に崇敬されて御嶽となったものとされている。¹²⁾

II 真乙姥と古乙姥

『球陽』巻三に記されているように、真乙姥・古乙姥という長田大主の二名の妹は、オヤケアカハチの乱後、琉球王府から真反対の対応を受けることになった。姉の真乙姥は高く評価され王より永良比金という神職を授けられた。一方、妹の古乙姥は逆賊アカハチの妻として誅殺された。正史には、真乙姥・古乙姥の死後のことは記されていないが、民間伝承の世界ではアカハチや真乙姥・古乙姥にまつわる伝説が現在に至るまで伝えられている。¹³⁾

次に、土地で採集した話を示すこととしたい。

〈事例1〉「真乙姥は戦の先払」

首里からの軍団を、迎えて、あれする。戦（いくさ）のさきばえ（先払カ）と言って、あるらしいですねえ。戦いは、ノロが、ツカサが、先頭に、やったらしいですねえ。その、首里からの、王府の軍団、軍隊を、迎え入れて、あれしたのが、真乙姥（マイツバ）ですね。だから女のあれを、こつちでは、戦（いくさ）をする時の、戦のさきばえと言って、前に出るのが、女巫女（おんなみこ）というんですか。厄を払うというあれもあるんじゃないですかね。¹⁴⁾

〈事例1〉は石垣市登野城で採集した話で、アカハチ討伐のために首里からやってきた軍団を迎え入れ、戦（いくさ）の先払（さきばえ）をしたのが巫女の真乙姥であったという語りである。ここで語られている戦（いくさ）の先払（さきばえ）は、戦闘の際に先陣で敵に呪術を行う役割の巫女という意味で使われているようである。『球陽』巻三「久米島ノ君南風、官軍ニ跟随シ、往イテ八重山ニ至リ、奇謀ヲ設ケ為シテ、深く褒嘉ヲ蒙ル」の項の記述では、先陣で敵に呪術を行う役割として久米島の神女君南風があたったようで、真乙姥の名は出てこない。しかし、石垣島で王府軍を迎えた巫女の代表が真乙姥と推定されるため、戦闘の際に、兄の長田大主とともに何らかの協力をしたと推定される。石垣島に土地勘のある巫女の役割としてはありそうなことなので、真乙姥が戦の先払をしたという〈事例1〉の語りは興味深いものがある。

〈事例2〉「真乙姥御嶽由来」

真乙姥（マイツバ）は、こうして、首里の王様からですね、ウファモといってー大きい、阿ですな阿部の阿、母ですねー、このウファモ（大阿母）の職をいただいたけれども、その前にはこういうね、功績があつて、王家からさういふふうな職をいただいたけれども、自分がそのお祈りをしてる時に、助けて、お祈りをして、倒れた。飲まず食わずで祈っている時に、祈りをしたために倒れたんで、平得（ひらえ）の、多田屋遠那理（タダヤウナリ）という人が、助けてくれたということですね、それを恩にきて、

「自分はいいいから、多田屋遠那理にその大阿母の職を与えてください」て言って

王様に願ったところ、そのようになさって、真乙姥は、永良比金（エラビンガネ）といって、職を、その下になるんでしょうか、大阿母の下に。永良比金という、職をいただいたと、いうことで。それで、元々こは、真乙姥が亡くなった墓として、みんなに礼拝されてはいたんですけども。その、真乙姥、今ではですね、豊作の、神様というふうな方であつたんだけど、最近、みんなで、神様として、豊年の願いを、ユーニンガイ（世願い）と方言で、世の願いと言うんですけどね。あの、ユーニンガイの場所として、あがめられているというふうな、ことですね。

来年の夏も。今年も豊作有り難うございました来年もまた、いい世をたまわりますようにということでの、願いを込めて、各村々からみんな旗頭を作つて、太鼓で、みんなで村々から集まつて、この真乙姥（御嶽）の前で、豊年の感謝をする。来年の豊作を願う、いうふうな、行事をする場となっておりますね。プール（豊年祭）¹⁵。

〈事例2〉は真乙姥御嶽がある新川で採集したもので、真乙姥御嶽の由来を語る内容となっている。真乙姥は飲まず食わずで祈っている時に倒れ、多田屋遠那里に助けられた。首里王から大阿母職をいただいたが多田屋遠那里にゆずり、永良比金職をいただいた。真乙姥御嶽は真乙姥の墓として礼拝されていたが、今は豊年祭の行事をする場所で、豊作の神様としてあがめられているという。〈事例2〉前半の語りは、先に引用した『球陽』巻三のC部分・D部分にあたる内容となっている。この、真乙姥が祈っている時に倒れて多田屋遠那里に助けられた話はよく知られており、石垣島の各地で聞き取り調査をすると、同様の語りを聞くことができた。真乙姥のお骨は真乙姥御嶽拝殿奥の石垣で囲まれたイビに現在も葬られている。〈事例2〉後半は、今は真乙姥御嶽の前で毎年豊年祭（プール）が行われているという内容である。プールは八重山諸島における稲粟等の収穫の祭りのことである。

石垣四ヶ村（登野城・大川・石垣・新川）の豊年祭は、毎年陰暦六月の二回目の壬および癸の吉日から二日間実施される。一日目（オンプール）は各々の

村の御嶽で豊年祭を行い、二日目（ムラプール）は新川の真乙姥御嶽で合同豊年祭が行われる。二日目のムラプールでは、豪華な旗頭の奉納、祈願、奉納諸行事、五穀の種子授与、巻踊、綱引きなどが現在も盛大に行われている。新川の真乙姥御嶽で合同豊年祭（ムラプール）が盛大に行われるようになったのは、旗頭の絵図帳などから明和・大津波（二七七二）の数年後の時代からであろうと推定されている¹⁶。この「石垣島四ヶ村のプーリイ（豊年祭）」は平成五年（一九九三）に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定されている¹⁷。

〈事例3〉「アカハチと古乙姥」

アカハチという名前では言わなかったんですけどね。ホーム・アカブザ。ホームでいったら大浜ですね、アカはアカハチのアカでしょうね。ブザといったら平民でしょ。土族はね、ユカラピトというんですよ。ユカラピト。百姓は、平民はブザというんですよ。新川（あらかわ）の人たちじゃなくて、昔のそういう人はそういう言い方をしたんだろうと思います。（祖母も）そういう風に（言っていた）。とっても力の強い、野蛮な人であつたと。それで、この人の足跡が、大浜の、この、海のね岩の上にも、足跡ができるぐらいの、豪傑というか、であつたと。（足跡は）子どもの頃遠足で行った頃に一度ね、見たような、あれですけど。

長田大主（ナータフーズ）のこともアカハチのことも、波照間と関係があるということとは、今になって、聞きますけれども、子どもの頃はああいふふうなことを聞きませんでした。（悪人だった）そういうことで、長田大主に殺されてしまったんだというふうには、聞いております。（長田大主は妻となった古乙姥にアカハチを）殺すようにと言って、言い含められて行つても、それも成し遂げずにおつたから、これはだめだということ、足でみな踏ませて¹⁸。

〈事例3〉は石垣市新川で採集した話で、アカハチの昔の呼称、性質、足跡、長田大主とアカハチの関係、古乙姥の役割と死後の扱いなどについて語られている。昔はアカハチという名前では言わず、ホーム・アカブザ（大浜の平民ア

カハチの意」と呼んでいたそうで、大正十三年生まれの話者の祖母もそう呼んでいたそうである。また、アカハチはとても力の強い野蛮な人とされ、アカハチの足跡が大浜の海辺の岩にあり、その足跡を子どもの頃遠足で一度見たということであつた。大浜地区の海辺の岩にあるアカハチの足跡は有名で、子どもの頃遠足で見たという話は石垣島では良く聞くことができる。筆者も大浜の海辺で足跡を確認したが、これは全国に伝わる「足跡石」の伝説の一つである。¹⁹ アカハチ伝説の一つとして足跡石の伝説が石垣島で語られていることがわかる。

〈事例3〉後半部の、長田大主とアカハチは波照間島と関係があるということとは今になって聞くが子どもの頃は聞かなかったという話者の語りについてであるが、これは、戦後のアカハチ再評価の動きが関係しているように思われる。戦後、アカハチに関係する話が各種媒体を通じて広報されるとともに、アカハチにまつわる詳細な情報を知る人々が増えたと推定される。〈事例3〉末尾では、アカハチは悪人だったので長田大主に殺されたと伝え聞いたこと、長田大主はアカハチの妻となった古乙姥にアカハチを殺すように言い含めたこと、古乙姥はアカハチを殺さなかったこと、古乙姥は死後墓を足で踏まれたことなどが語られている。

大浜底原に「スニタバル」という地名があるが、この地でアカハチは誅殺され、捕らえられた古乙姥はシニヤマという体刑で罰されたと伝えられている。²⁰

III 真乙姥御嶽とカタツムリ墓

土地の伝承によると、古乙姥は兄長田大主の命令でアカハチと政略結婚させられ、アカハチを殺すように言い含められていたが、アカハチを殺さなかったため、アカハチとともに反逆者として誅殺された。そして、古乙姥の骨は姉が祀られている真乙姥御嶽の隅に葬られたが、わざと道路に接する場所に墓が作られ、反逆者への見せしめとして人々に踏ませたという。古乙姥の墓はツダミ（カタツムリの意）墓と蔑称された。

〈事例4〉「カタツムリ墓由来」

クイツバ（古乙姥）の話はですね、そういうふうにして、敵方に味方をしたということですね、私の子どもの頃は、

「クイツバの墓だ」っていつて、現在あの、4号線もうちょっと拡張してこれだけですけども、その、右手端の方にですね、一枚石で、こう建ててあつて、上にも一枚、敷かれていたんですよ。それで「ここはクイツバの墓だ」ということでね、「悪い人だから、足でみんな踏みつけるんだ」と言つてね、子どもたちは、その上、ちようど石が、平らになつていきますので、今で言えば、珊瑚石の一枚になつたもので、平らで子どもたち遊ぶのに、座るのに、大変適当だったんで、よくそこで、踏んで遊んだりしたんです。それでこの、石の欠けたところから中を見るとね、カタツムリが陰を慕つて来て、それでここで寿命が尽きたんじゃないでしょうか。カタツムリの殻がたくさんあつたんです。それで子どもたちは、カタツムリをツダミと言いますのでね、

「ツダミの墓だツダミの墓だ」っていつて、クイツバの墓じゃなくつて「ツダミの墓だ」って子どもたちは言つておりました。

あれはね、もう道路拡張で、ここはもう道路のほうになつてると思います。²¹

〈事例4〉は石垣市新川で採集した話で、カタツムリ（ツダミ）墓の由来を語っている。敵方に味方をした悪人ということで、話者（大正十三年生まれ）が子どもの頃は、近所の子どもたちが古乙姥の墓の上に乗つて踏んで遊んだりしていたという。墓は珊瑚石の板を組み合わせて作成されたものだったそうで、石の欠けたところから中を見るとカタツムリの殻がたくさんあつたので、子どもたちは「ツダミの墓」と呼んでいたそうである。古乙姥の墓があつた場所は、道路拡張工事のため、現在は道路になつていてということであつた。

古乙姥の墓は昔からツダミ墓と呼ばれていたようで、柳田国男が大正十年（一九二一）一月に石垣島で調査した際の手帳にツダミ墓に関する記述が三カ所みえる。柳田は手帳に「真乙姥 マイツバ／小乙姥 クイツバ／同所にあり／ツダミ（蝸牛）墓といふ。共に長田大翁王（フーズ）の妹なり。クイチバの石槨の中には蝸牛（ツダミ）数多し」「ツダミヌハカ（小乙姥）／石槨の中に古き

蝸牛の殻多くあり。土人尊敬せず、網曳の時など此上にのる。」「○ツダミと蜆の事、古乙姥（クイツバ）の石棺はあけぬ故、此殻たまるなりといふ也。」²²と記している。

柳田が石垣島でツダミ墓について調査したのは大正十年一月のことで、〈事例4〉の話者は大正十三年生まれであるから、柳田が石垣でツダミ墓を見聞いた頃から遠くない時期に〈事例4〉の話者は新川地区で子ども時代を過ごし、友だちとツダミ墓周辺で遊んだことがわかる。柳田の手帳の記述内容と〈事例4〉の語りの内容はほぼ同じであるが、柳田と〈事例4〉の話者が見たツダミ墓周辺の光景はほぼ同じものであったと思われる。

〈事例5〉「カタツムリ墓と子どもの遊び」

クイツバ（の墓が）ありましたね。大きな木のすぐ南側です。堀のね。南側の堀沿いにです、ちよつとありました。南側の、大きなアコウの木、南側。そして、ちよつと草あつてですね。みんなが、踏ましてもよろしいようにですね、して。ちよつとちよつと穴が開いとるもんですから、私ら子どもん時にですね、カタツムリをです、あ、尻、べつこうをです、つぶしておつたんですよ。つぶして、負けた方はね、向こうの穴に捨てたんですよ。ツダミの墓つてね、がらくたは皆捨てた。ツダミの墓つてね。負けた方がね、捨てたんですよ。結構荒いことしてね。カタツムリね、カタツムリはこの先とがってますね、よう先とがってるんですね。それをつぶし合いっこするんですよ。つぶし合いっこしてね、勝負するんですよ。したら弱い方がね、つぶれますから。弱い方をね、だめだったと言ってね、あそこにあん中に捨てた。子どもの頃は。つぶし合いで。で、あの、クイツバの墓が今現在大浜にありますよ。大浜。オヤケアカハチの。オヤケアカハチの奥さんなんです。政略結婚してね、オヤケアカハチと。²³

〈事例5〉は新川の男性（昭和七年生まれ）から聞いた話で、戦前、真乙姥御嶽周辺では、子どもたちがカタツムリの先がとがった部分でつぶし合いをして勝負し、弱い方がつぶれるとツダミ墓の穴が開いた部分から中に殻を捨てる

遊びをしたという語りである。〈事例4〉の話者に聞くと、この遊びを「ツダミアーシ」（カタツムリ遊びの意か）と呼んでいたそうである。墓の石槨の中にカタツムリの殻がたくさんあったのでツダミ墓と呼称されていたようであるが、石槨の中にカタツムリの殻がたまつた理由は不明である。柳田は石槨を開けないので殻がたまる（古乙姥（クイツバ）の石棺はあけぬ故、此殻たまるなりといふ也）と説明されたようであるが、〈事例5〉の語りのように、子どもたちがカタツムリの殻を石槨内に入れる遊びをした場合もあったことがうかがえる。また、殻のあるカタツムリは「殻の材料になるカルシウムをブロック堀やコンクリート」・「石灰岩などから摂取しなければならぬ」²⁴とのことであるから、あるいは、ツダミ墓の珊瑚石の板からカルシウムを摂取するためにカタツムリが集まつた結果、石槨の中にカタツムリの殻がたまつた可能性もあるように思われる。

〈事例6〉「カタツムリ墓と豊年祭」

クイツバは、オヤケアカハチの、嫁なつて、何結婚ていうの、政略結婚。長田大主（ナータフーズ）がこうして行かしたけど、それでこじれて、クイツバは自分の主人を立てて、オヤケアカハチと一緒になつたというから、逆賊されて、もう。墓はね、真乙姥御嶽のね、前の所にあつたらしい。して、なんでかいうたら、豊年祭の時たくさん人が集まるでしょ。その人たちが、上に乗るでしょ。人に踏ませる。わざとそういうにして作つてあつたという話を聞いたことがあるんですよ。それを今移して、大浜に移したらしい。

わざと、豊年祭の時に人に踏ますように、こつちの道のそばに作つたという話は、小さい時にね、聞いた覚えがあるんだけど。²⁵

〈事例6〉は石垣市平得で採集した話で、古乙姥の墓はオヤケアカハチと一緒になつた逆賊のもので豊年祭の時に多くの人に踏ませるためにわざと道のそばに作つたという話を小さい時に聞いたという語りである。この、豊年祭の時に踏ませるために道のそばに古乙姥の墓を作つたという話は石垣島各地で聞くことができる。柳田国男も、古乙姥の墓を土地の人は尊敬せず豊年祭の綱

引きの時などに墓の上に乗る（「土人尊敬せず、綱曳の時など此上にのる」と記述していることから、調査時にそのような説明を受けたことがわかる。

〈事例5〉〈事例6〉の話者が墓は大浜に移転したと語っているように、戦後、古乙姥のカタツムリ墓は大浜に移された。次節でその経緯を詳しく述べることにしたい。

IV カタツムリ墓の大浜移転

古乙姥の墓が大浜に移された経緯が良くわからないため、折をみて調査を重ねた結果、ようやく移転の経緯がわかってきた。

古乙姥の墓を大浜に移そうとする最初の動きは、大東亜戦争後、大浜の崎原公園に「オヤケ赤蜂之碑」を建立する時に起こったようである。『大浜村誌』によると、戦後、大浜の崎原公園に「オヤケ赤蜂之碑」を建立する時、古乙姥を合祀しようとしたが、長田大主の子孫である真乙姥御嶽関係の方に強く反対されたため実現せず、昭和二十八年（一九五三）に「オヤケ赤蜂之碑」のみが建立されたという²⁶。

その時に建立された「オヤケ赤蜂之碑」は現在も大浜の崎原公園にある。「オヤケ赤蜂之碑」正面に向かって左側の石碑には「碑文」として次のような文が掘られている（本文は「オヤケアカハチ五〇〇年祭実行委員会」により「二〇〇〇年（平成十二年）八月吉日転記」された新造の石碑に刻まれたものを引用した。引用にあたって句読点を付した）。

オヤケアカハチは一名ホンガワラアカハチとも称した。豪勇衆にすぐれ、群雄割拠のその当時大浜村を根拠として酋長に仰がれていた。文明十八年（二四八六）中山尚真王は使者を八重山に特派して、イリキヤアモリの祭祀を淫祠邪教として厳禁したところ島民は信仰への不当なる弾圧だとして、いたく憤激した。ここにおいて、アカハチは島民の先頭に立って反旗をひるがえし朝貢を両三年壟断して中山の反省を求めたが尚真王は大里王子を大将とし副将並びに神女君南風らと共に精鋭三千人を兵船四十六隻で反乱

鎮圧に派遣した。アカハチは大いに防戦奮闘したが衆寡敵せず恨みをのんで底原の露と消えた。時は明応九年（一五〇〇）今から四五四年前のことである。アカハチは封建制度に反抗して自由民権を主張し島民のためにやむにやまれぬ正義観をもつて戦ったのである。戦いは利あらず敗れたけれどもその精神と行動は永く後世に光芒を放つことであろう。ここに碑を建ててその偉徳を讃えるゆえんである。

一九五三年四月十六日

オヤケアカハチ顕彰碑建立

委員長 廣田 禎夫
撰 文 喜舎場永珣²⁷

オヤケアカハチ顕彰碑建立委員長であった廣田禎夫氏が中心となって昭和十八年（一九五三）に「オヤケ赤蜂之碑」を建立した時、八重山研究の碩学喜舎場永珣（一八八五―一九七二）氏が石碑に刻む文章を作成した。この文章がきっかけとなり、オヤケアカハチ再評価の流れが大きくなったとされており、重要な意味を持つ碑文といえよう²⁸。

昭和二十八年（一九五三）の「オヤケ赤蜂之碑」建立時には古乙姥の墓は移転しなかったわけであるが、昭和四十年頃に、カタツムリ墓の第一回目の移転が実行されたようである。

〈事例7〉「カタツムリ墓の移転」

大浜にね、アカハチの所に持つて行った。元はね、マイツバ（御嶽）にあったんですよ。道路の、西側によ。クイツバは、マイツバはね、非常に嫌った人間だからね。これはね、道路の拡張工事でね、移転することになってね、それを一応、（マイツバ）御嶽の後ろの方にね、ブロックでつないでね、向こうに、作ったんですよ。それがね、大浜が、アカハチのね。道路拡張のあれでね。これをあそここのまあ、今の拝所があるでしょう。拝所の西側にね、西側に、ブロックでこういうふうにして。向こうに一応もう、移したんですよ。

それでね、何年前かね、大浜部落からね、自分かたの所に、これはね移して

くれということ、移したわけさ。(大浜に移したのは) 昭和四十年、まだあとでしょう。⁽²⁹⁾

〈事例7〉は石垣市新川で採集した話で、カタツムリ墓が移転した時の語りである。ここでは第一回目の移転と第二回目の移転の話が混在して語られているため分かりにくい、先にみた〈事例4〉の話者も「もう道路拡張で、ここはもう道路のほうになってると思います」と語っているように、カタツムリ墓の第一回目の移転は道路の拡張工事に起因する移転だったようである。第一回目の移転がいつ行われたのかはつきりしないが、真乙姥御嶽周辺で聞き取り調査を行ったところ、昭和四十年頃に道路拡張工事に起因する移転が実行されたと語る話者が多かった(昭和三十五年頃という話者もいた)。その時、カタツムリ墓を解体して遺骨を探したようであるが、結局遺骨は見つからなかったようである。

カタツムリ墓の移転について牧野清氏は「真乙姥御嶽では永年の間に霊域の縮小変動などのこともあり、いろいろ努力したけれども結局はツダミ墓は発見できず、古乙姥の遺骨も収骨できなかった。その為に遺骨の代わりに小石を拾い、霊を移すという祭祀をとり行なったということである⁽³⁰⁾」と記しているが、これは第一回目の移転時の状況についての説明かと思われる。

〈事例7〉の話者が説明しているように、第一回目の移転時、真乙姥御嶽の後ろの方にコンクリートブロックでつないで新たな古乙姥の墓を作ったという。現在は大浜に移転してそれは撤去されているが、場所は、真乙姥御嶽拝殿に向かって左側の、現在は水道が設置されている場所あたりに古乙姥の墓が新たに作成されたらしい。一メートル位の高さのコンクリート製の墓だったそうである。しかし、牧野清氏が記しているように、古乙姥の遺骨が発見されなかったため、第一回目移転時に作成された古乙姥の墓には遺骨の代わりに小石を拾い霊を移すという祭祀を行って葬ったようである。

次にカタツムリ墓の第二回目の移転が昭和四十五年(一九七〇)に実施された。移転のきっかけは、真乙姥御嶽のツカサの一人の夢見であった。

〈事例8〉「カタツムリ墓移転の発端」

先年亡くなった、ツカサの方が、何か夢見で、そういう、「そこにクイツバの墓がある」とかとおっしゃって。私はその方の孫から聞いたんですけれどね。ということ、掘り起こして、骨があったから、それを持って行って大浜の、アカハチのそばに、一緒にしておいてあるとかという話を聞いたことがあります。これ近年聞きましたけれどもね。⁽³¹⁾

〈事例8〉は石垣市新川で採集した話で、真乙姥御嶽のツカサの一人が古乙姥の墓の場所を夢で見たためそこを掘り起こしてみると、実際に骨が出てきたので、大浜に移したらしいという語りである。

その時に夢見をした真乙姥御嶽のツカサはもう亡くなっているとのことだったので、親族の方からその時の経緯を聞くことができた。

〈事例9〉「ツカサの夢見」

あつちにアコウ木がありますよ。入ったらね、左側にアコウ木があつて。二本あるんですよ。これが、アカハチと。真乙姥(御嶽)かね。二本の、木の、間に、アカハチが埋められてると。だつてもわからなかったんですよ、これ。誰もわからないけど、「こつちの間に埋められている」ってうちの母に(夢で)言ったから、うちの母は、「こつちに埋められている」と(夢で)言っているからと言ってこの大浜の部落の方に、役員なんかに、言ってからやった。本当にありました。してから歯もよ、大きかったって婆ちゃんが言っていました。歯がすごいから、この人は大きな方だったはずよってから。⁽³²⁾

〈事例9〉は真乙姥御嶽のツカサの夢見の話である。ツカサの夢の中にアカハチが出てきて、真乙姥御嶽にある二本のアコウ木の間に埋められていると言ったので、大浜の役員たちも立ち会って掘ったところ骨が出てきたという。

当時、ツカサの夢見がきっかけとなり、新川地区の役員と大浜の公民館長や部落会長らが立ち会って二本のアコウ木の間を掘ると、本当に骨が出てきたそうである。現在、真乙姥御嶽に入って左側に大きなアコウ木があるが、当時は今ほど大きくなく、二本のアコウ木には間が空いていたという。

この時のことについて牧野清氏は「ことの起こりは、真乙姥御嶽の神司たちの夢にしばしば古乙姥が現われ、何事かを訴えたということからで、このことが長浜浩照大浜公民館長に伝えられて協議され、合祀の実現という運びになったようである。当日はたくさんの方々が正装して参集し、厳肅裡に万端の祭祀がとり行なわれた」と記している⁽³³⁾。

また、この時のことについて『大浜村誌』は「その後昭和四十五年（一九七〇）の夏頃、これまで、古乙姥とアカハチの合祀を強く反対して来られた、石垣の長田大主の末裔である真乙姥御嶽の神司を始めとするその他の関係御嶽の司等が、いろいろの「お告げ」があつたとして、大浜村に建立されたオヤケアカハチの碑に古乙姥を合祀するのが本筋であり、古乙姥もそれを望んでいるとしてその合祀を大浜村に申し入れたのである。／大浜村では喜んでこれを受け入れることとし、昭和四十五年（一九七〇）九月十九日、当時の大浜公民館長の長浜浩照氏等の大浜村の役員たちは、前記の方々と共に、古乙姥の墓を掘り起こして、納骨された厨子がめを掘り当てアカハチの碑の後方に丁寧に埋葬した。」と記している。

これらのことから、昭和四十五年（一九七〇）の夏頃、真乙姥御嶽のツカサらが夢で「お告げ」を受けたことがきっかけとなって古乙姥とアカハチを合祀しようという話が起こり、昭和四十五年九月十九日に新川と大浜の役員が立ち会って真乙姥御嶽にある二本のアコウ木の間に掘り起こしたところ納骨された厨子がめが出てきたので、神司たちが祭祀を行ってアカハチの碑の後方に埋葬したということがわかった。

問題は、掘り出された厨子がめのものであるのかという点である。ツカサの夢見ではアカハチのもので、掘り出された骨も歯も大きかったそうだが、結局古乙姥のものとされたようである。この点について、『大浜村誌』は「このことについて、廣田禎夫氏は次のように話された。／石垣のある一部の人は、大浜に移した骨がめは、古乙姥のものではなく、アカハチのものであると説くのであるが、この骨がめを掘りあげた時、これに立ち会った石垣の関係者は、これは

間違ひなく古乙姥の骨がめであると確認し、また、郷土史の研究者宮良賢貞氏も、骨については鑑定することは出来ないが、厨子がめは、その当時の作であることは間違ひないと確認された。」と述べている⁽³⁴⁾。アカハチのものであると説く「石垣のある一部の人は」とは、夢見をしたツカサのことかと思われる。おそらく、逆賊アカハチの骨を真乙姥御嶽に納めることは論理的に考えるとありえないため、厨子がめを古乙姥のものとして判断したと推定される。

もし、厨子がめのものであると推定された場合、長田大主（もしくは長田大主の子孫の誰か）が真乙姥御嶽にある二本のアコウ木の間に古乙姥の骨を埋めたと仮定した場合、伝えられてきたものとは違う仮説が生じることになる。想定される仮説は次の二つである。

仮説1……長田大主はアカハチに味方した逆賊のものとして道の側に粗末なツダミ墓を作り、人々に踏ませた。しかし、妹を不憫と考えた「長田大主」はツダミ墓の中には骨を入れず、ひそかに真乙姥御嶽にある二本のアコウ木の間に妹の骨を埋め、実際には踏ませないようにしてやった。

仮説2……長田大主はアカハチに味方した逆賊のものとして道の側に粗末なツダミ墓を作り、人々に踏ませた。しかし、古乙姥を不憫と考えた「某」（長田大主の子孫か）はツダミ墓の中から骨を取り出し、ひそかに真乙姥御嶽にある二本のアコウ木の間に古乙姥の骨を埋め、踏ませないようにしてやった。

道路の拡張工事でツダミ墓を掘った時に「骨がなかった」という事実から考えると、いつの時代かは不明であるが、誰かがツダミ墓の中の古乙姥の骨を移動させたと推定される。今後、これらの仮説を含め、新たな視点で考察を加えて行く必要がある。

結 語

以上で、石垣島の真乙姥御嶽にあった古乙姥のツダミ（カタツムリ）墓をめぐる諸問題についての筆者なりの考察を終えることとする。

長田大主の妹であった真乙姥と古乙姥は、一五〇〇年のオヤケアカハチの乱

後、琉球王府から真反対の対応を受けた。琉球王府に貢獻が認められた真乙姥は高く評価されて尚真王から永良比金という神職を授けられたが、古乙姥は逆賊の妻として誅殺された。古乙姥は兄長田大主に命じられてアカハチと政略結婚させられたが、兄や王府の意向に背き、アカハチの妻として誅殺される道を選んだという。

長田大主は逆賊の墓として真乙姥御嶽隅の道のそばに骨を埋め、人々に踏ませたとされる。真乙姥御嶽奥のイビにある真乙姥の墓は石を積みあげて造った立派なものであるが、古乙姥の墓は珊瑚の板を組んだ粗末なもので、ツダミ（カタツムリ）墓と蔑称された。数百年間にわたって粗雑な扱いを受けた古乙姥の墓をアカハチが活躍した大浜に移転しようとする動きは、第二次世界大戦後によくやく始まった。調査の結果、移転に関して、次の三回の動きがあったことがわかってきた。

1、移転の申し入れと反対……第二次世界大戦後、アカハチ再評価の気運が起こり、昭和二十八年（一九五三）大浜の崎原公園に「オヤケ赤蜂之碑」が建立された。碑文に刻む文章は八重山研究の碩学喜舎場永珣氏が作成し、この碑文をきっかけにアカハチ再評価の流れが大きくなったとされる。この時に古乙姥の墓を真乙姥御嶽に合祀しようとし入れたが、反対されて実現しなかった。

2、道路の拡張工事による移動……昭和四十年前後頃、道路の拡張工事のため古乙姥のカタツムリ墓を真乙姥御嶽の奥に移動させたが、遺骨が見つからなかったため、小石を拾って霊を移す祭祀を行い、コンクリート製の小さい墓を作成した。

3、神司の夢見により移転実現……昭和四十五年（一九七〇）の夏頃、真乙姥御嶽の神司の一人が夢見でお告げを受けた。そのお告げがきっかけとなり、昭和四十五年九月十九日に新川と大浜の役員立ち会いのもとで真乙姥御嶽にある二本のアカウ木の間を掘ったところ、納骨された当時の厨子がめがでてきたため、神司たちが祭祀を行ってアカハチの碑の後方に埋葬した。

古乙姥のカタツムリ墓をめぐるこれらの動きから、神司の夢見が公民館長を

はじめとする地域の役員をも動かす大きな力となったことがわかり、注目される。

石垣市大浜地区では、アカハチ没後五百年を記念して、新大浜公民館建設、アカハチ銅像作成、古乙姥の碑作成、大浜村誌発刊が企画され、平成十二年（二〇〇〇）十月十四日、「オヤケアカハチ五〇〇年祭」が盛大に開催された。³⁶現在、崎原公園内の「オヤケ赤蜂之碑」の横には平成十二年に新造された「古乙姥の碑」が建っている。

オヤケアカハチの乱は一五〇〇年の事件であるが、石垣島では現在も濃密な関連伝説が伝承されており、解明されていない問題も多い。残された諸問題の検討は今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書 第五』（井上書房・一九六二）、三五頁。
- (2) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書 第四』（井上書房・一九六二）、四三頁。
- (3) 桑江克英氏訳註『球陽』（三一書房・一九七二）、二二～二二頁。
- (4) 牧野清氏『新八重山歴史』（私家版・一九七二）、九四～九六頁。
- (5) 注3の『球陽』、五一頁。
- (6) 真境名安興氏『沖繩一千年史』（『真境名安興全集第一巻』琉球新報社・一九九三）、一四三頁。
- (7) 与那国の鬼虎征伐がいつどのように行われ誰が参加したか等の詳細は、原田信之「沖繩・与那国島の鬼虎伝説」（『新見公立短期大学紀要』二九、二〇〇八・12）参照。
- (8) 谷川健一氏「与那国と宮古の歴史伝承の影に」（『与那国町史第一巻』与那国町役場・二〇〇二所収）、五三頁。
- (9) 伊波普猷氏『沖繩考』（『伊波普猷全集 第四巻』平凡社・一九七四）、四九五～四九六頁。
- (10) 稲村賢敷氏『宮古島庶民史』（三一書房・一九七二）、二二四頁。

- (11) 『大浜村誌』（大浜公民館・二〇〇二）、一八～二三頁。
- (12) 牧野清氏『八重山のお嶽』（あゝまん企画・一九九〇）、一一五頁・一八七頁。
- (13) 注11の『大浜村誌』第三章「オヤケアカハチの伝説」、丸山顕徳氏「八重山のオヤケ赤蜂―英雄伝説―」（同氏『古代文学と琉球説話』三弥井書店・二〇〇五、所収）、藤井佐美氏「南島説話と祭祀の変容―神女・真乙姥をめぐる伝承―」（尾道市立大学日本文学論叢）第八号、二〇一二・12、ほか。
- (14) 話者は沖縄県石垣市登野城の男性（S6生）。平成二十四年（二〇一二）年八月十八日・原田調査、採集稿。
- (15) 話者は沖縄県石垣市新川の女性（T13生）。平成十九年（二〇〇七）八月十三日・原田調査、採集稿。
- (16) 注12の牧野清氏『八重山のお嶽』、一一八頁。
- (17) 文化庁ホームページに公開されている「国指定文化財等データベース」参照。[平成二十五年八月] <http://www.bunka.go.jp/index.html>
- (18) 話者は沖縄県石垣市新川の女性（T13生）。平成十九年（二〇〇七）八月十三日・原田調査、採集稿。
- (19) 『縮刷版』日本昔話事典（弘文堂・一九九四）、「足跡石」の項参照。
- (20) 注11の『大浜村誌』に「アカハチと共に大浜底原まで逃げ延びて来た古乙姥は兄長田大主の命に背いて、アカハチと共に応戦したので、捕らえられて底原の原頭で「シニヤマ」（脛に木をはさんで縛りつけてこらしめる体刑）にかけられて罰されたので、この地を「スニタバル」というとの古老からの伝承が残っている」（一八五頁）という記述がある。
- (21) 話者は沖縄県石垣市新川の女性（T13生）。平成十九年（二〇〇七）八月十三日・原田調査、採集稿。
- (22) 柳田国男著・酒井卯作編『南島旅行見聞記』（森話社・二〇〇九）、一一三～一一七頁。
- (23) 話者は沖縄県石垣市新川の男性（S7生）。平成十九年（二〇〇七）八月十三日・原田調査、採集稿。
- (24) 稲垣栄洋氏『カタツムリのごちそうはブロック塀!』（角川学芸出版・二〇一二）、五八頁。
- (25) 話者は沖縄県石垣市平得の男性（S24生）。平成十九年（二〇〇七）八月十五日・原田調査、採集稿。
- (26) その時の経緯について、注11の『大浜村誌』に「大東亜戦争後、字大浜の崎原公園に「オヤケ赤蜂の碑」を建立するとき、当時の建設委員長の廣田禎夫氏は、アカハチの碑に古乙姥は合祀すべきであるとして、長田大主の末裔である字石垣の長田信智氏並びに国吉氏に相談したところ賛成の意を表された。ところが長田大主の子孫である真乙姥御嶽関係の方に強く反対され、その実現を見ることが出来なかった。／反対する理由は、古乙姥は長田家の一門であって、反逆者であるアカハチと合祀することは出来ない。古乙姥は長田家で祭祀をするのであった。／そういうこともあって、オヤケアカハチの碑は一九五三年建立されたのである。」（一八六頁）と記されている。
- (27) 注11の『大浜村誌』に「オヤケ赤蜂之碑」の「碑文」が引用されているが（一八七～一八八頁）、若干の誤植がある。
- (28) 注11の『大浜村誌』「赤蜂の碑」写真キャプションに「碑文は郷土史家喜舎場永珣氏の撰文で「英雄説」が広く世に出るきっかけとなる」（一七八頁）と記されている。
- (29) 話者は沖縄県石垣市新川の男性（T5生）。平成十九年（二〇〇七）八月十三日・原田調査、採集稿。
- (30) 注12の牧野清氏『八重山のお嶽』、一八二頁。
- (31) 話者は沖縄県石垣市新川の女性（T13生）。平成十九年（二〇〇七）八月十三日・原田調査、採集稿。
- (32) 話者は真乙姥御嶽のツカサだった故真境名光子さんの親族の女性。平成二十五年（二〇一三）九月二十七日・原田調査、採集稿。
- (33) 注12の牧野清氏『八重山のお嶽』、一八二～一八三頁。

(34) 注11の『大浜村誌』、一八六頁。

(36) 注11の『大浜村誌』、六五三～六七八頁。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成二十三年度～二十六年度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における事物起源伝説の調査研究」(課題番号23520236)の成果の一部である。

連絡先…原田信之

新見公立大学看護学部 〒七一八―八五八五 新見市西方二六三―二

(二〇一三年十一月十三日受理)